世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Building Process of “Ashibe-ya” at Wakanoura

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 真一, 西本, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/301

和歌の浦「あしべ屋」の増改築の過程

Building Process of “Ashibe-ya” at Wakanoura

西　本　真　一*
Shinichi Nishimoto

西　本　直　子*
Naoko Nishimoto

要旨

平成22（2010）年8月に国指定の名勝となった和歌の浦には、以前、高名な老舗旅館「あしべ屋」が存在した。その本館とその附属施設について考察をおこない、関連文献や古葉書などの画像史料を用いながら、明治・大正時代にかけての増改築の様子を大きく3期に分けて復原する。前半ではまた、この時期に属する諸史料の特徴に関しても触れる。

1、前言

和歌山県の和歌の浦にはかつて、あしべ屋と呼ばれる旅館が建っていた。今ではその跡地がわずかに残るだけであるが、江戸時代の初期に紀州藩の初代藩主・徳川頼宣によって設けられたあしべ茶屋に端を発し、後の明治・大正時代には有名な会席旅館として栄えたことが知られている。

皇族や文人墨客が多数訪れており、明治22年の春には小泉信吉が妻とまだ幼かった小泉信三とその姉、女中とともにあしべ屋旅館にしばらくの間、滞在した[1]。明治34（1901）年2月14日に南方熊楠が来日した孫文と再会し、旧交を温める場として選んだのもこの旅館である[2]。田山花袋が和歌の浦を訪れてあしべ屋の夜の印象を記したのは、これよりいくらか前の明治32（1899）年のことであった[3]。明治41（1908）年3月には大学を卒業したばかりの志賀直哉が大学生であった木下利玄・山内英夫（後の里見弴）と一緒に和歌の浦へ訪れており、下り松の枯死を伝え、またあしべ屋を一瞥したことを旅行日記に記している[4]。明治44年、夏目漱石があしべ屋別荘に宿泊の予約を入れたことを日記に記録している点は前稿にて指摘した[5]。

あしべ屋は大正14（1925）年に廃業し、後発の旅館であった望海楼に吸収されたが、その後も老舗旅館としての名声は続いたと見られ、望海楼の支店としてあしべ屋の名を残したようである。俳誌「ホトトギス」で活躍し、「かつらぎ」の主宰者であった阿波野青畝が昭和6（1931）年4月6日に第一句集「萬両」を上梓した際に出版記念会を催したが、これもあしべ屋で開かれたと記録されており、俳界における重鎮をなす山口誓子や高浜虚子たちが出席した[6]（図1）。

*環境学部非常勤講師

図１：「『萬両』出版記念会、和歌の浦・あしべ屋にて」、句誌「かつらぎ」のHPより
（http://www.haiku-katsuragi.com/ayumi.htmlより転載。閲覧日：平成23［2013］年10月31日）

1　小泉信三「師弟」:「小泉信三全集」第16巻（文藝春秋、昭和45［1970］年）、pp. 120-130；秋山加代編「現代の随想4 小泉信三集」彌生書房（昭和56［1981］年）、pp. 108-134、特にp. 120。山内慶太「慶應義塾史跡めぐり第80回：紀州和歌山と義塾の洋学」三田評論1168（平成25［2013］年）、pp. 68-71も参照。父親と同じく慶応大学塾長の任に当たった小泉信三は後に、今上天皇が継宮明仁親王であった時の教育掛（東宮御教育常時参与）も務めた。なお新島襄・八重夫妻もこれより早い明治10（1877）年7月、和歌の浦に滞在しているが、sea bath（海水浴）を目的としている点が興味深い。当時、海水浴は娯楽というよりも医療効果が喧伝されており、静養のために訪れたと見られる。「新島襄全集」第6巻:英文書簡編、同朋舎出版（昭和60［1985］年）、pp. 184-186を参照。英文書簡の断片的な記述をもとにするならば、新島夫妻はあしべ屋ではなく、和歌の浦に在住の漁師から空き家を借り、そこに滞在したように思われる。新島襄･八重夫妻が和歌の浦を訪問したことを示す文献に関しては和歌山大学教育学部･米田頼司教授に御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。療養を目的とした当時の和歌の浦の状況に関しては、高嶋雅明「近代の開発と和歌浦」和歌山地方史研究17（平成元［1989］年）、和歌山地方史研究会、pp. 32-37；高嶋雅明「和歌浦開発と和歌浦土地株式会社:若干の資料紹介と覚え書」、紀州経済史文化史研究所紀要第10号（平成2［1990］年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、p. 26；高嶋雅明「近代の和歌浦」薗田香融監修、藤本清二郎・村瀬憲夫編「和歌の浦：歴史と文学」和泉書院（平成5［1993］年）、pp. 115-139を参照。明治初期の海水浴に関しては小口千明「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」人文地理第37巻第3号（1985）、pp. 23-37；後藤新平「海水功用論」（石井栄三、明治15［1882］年）など。明治10年代における、あしべ屋に関わると思われる重要な記述としては、「小梅日記」中の明治11［1878］年4月26日付の文面、「天気能候に付、午後より和歌へ行。子供弐人と岩崎･八田･宮崎･宮升・田中・辻等合十三人。和歌三つ橋の際の料りやにて、かきめし・にざかな・造り等、酒共壱円五十八錢のよし。一人分十九錢余、夕方より雨降来り、車にて帰る。」という部分が注目される。河合小梅著、志賀裕春・村田静子校訂「小梅日記3：幕末・明治を紀州に生きる」東洋文庫284、平凡社、明和51（1976）年、pp. 18-19を参照。

2　「南方熊楠全集」別巻2（平凡社、昭和50［1975］年）、明治34（1901）年2月14日の日記、また「牟婁新報」明治44（1911）年11月9日の記事を参照。ただし、あしべ屋にて宴会を催したが、宿泊したのは市内の別の旅館である。

3　田山花袋「南船北馬」（博文館、明治32［1899］年）；島津俊之「経験とファンタジーのなかの和歌浦：田山花袋『月夜の和歌浦』を読む」、空間・社会・地理思想14号（平成23［2011］年）、pp. 41-67。

4　里見弴「若き日の旅」（中市弘、昭和15［1940］年）、p. 188；志賀直哉・木下利玄・山内英夫「旅中日記寺の瓦」（中央公論、昭和46［1971］年）、p. 113。

5　西本直子･西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」、武蔵野大学環境研究所第2号（平成24［2012］年）、pp. 77-93。なお、p. 79の「そこでは屋根に植物が繁茂するほど荒れ果てた小さな寺院の様子が観察される」という部分は誤りである。御指摘いただいた和歌山大学・米田頼司教授に感謝申し上げる。夏目漱石による和歌山の来訪については梶川哲司「漱石の作品にみる和歌山1～8」和歌山県高等学校社会科研究協会会報、第54号（平成16［2004］年）～第61号（平成23［2011］年）の一連の研究、また溝端佳則「漱石が見た百年前の和歌山：写真・小説・日記・新聞記事より」、和歌山県立文書館『和歌山県立文書館だより』和歌山県立文書館、第31号（平成23［2013］年）、pp. 2-7を参照。

本稿ではあしべ屋本店と別荘（別館）、及び休憩所といった付属施設の増改築に関し、その変遷を概観することを目的としたい。和歌の浦に立つ旅館の変遷に関しては、すでに先行研究が存在する[7]。文字史料の他、大量に残されている画像史料の時代判定に際して細かい観察がなされており、ここではそれらの論考に多くを負った。上記した要人たちが訪れた足跡のうち、実際にあしべ屋という旅館名が記録されている史料を優先しながら、時代ごとのあしべ屋の姿を探る際、どのような史料が残されていて考察に役立つのか、またそれらの史料をどのように扱うべきかを改めて見定めることが第一の作業である。

２、あしべ屋をめぐる建造物の研究対象

最もあしべ屋が隆盛をきわめていた時期の様子を示すものとして、岡田久楠[8]の作製による明治末期の地図「紀伊和歌浦明細新地図」[9]を挙げることができる（図２）。

ここにはあしべ屋の本店の他にいくつかの関連施設が細かく記入されているため、有用である。本論では便宜的に記号を与え、以下の区別をおこなうこととする。

Ａ：本店
Ｂ：北の別荘（玉津島別荘）
Ｃ：妹背別荘
Ｄ：別荘としての湊御殿（松窓庵：現在、養翠園に移築）
Ｅ：３つの渡し船の船着所（休憩所）
Ｆ：海水浴休憩所

6　図１にうかがわれる床の間は１間半の幅を有し、このような座敷はあしべ屋の妹背別荘には存在しないため、あしべ屋の本館か、あるいは北の別荘（玉津島別荘）での撮影と推定される。あしべ屋が廃業した後、妹背別荘は西本健次郎に譲渡された。その正確な年代は判然としないが、滝上巨志「皇室と紀州」和歌山大公論社（大正11［1922］年）の口絵写真では、「妹背別荘（西本氏邸）」という記述が見られる。山本喜平「海草郡誌」和歌山県海草郡役所（大正15［1926］年）、p. 971でも、「明治四年の頃養珠寺に合せて、其跡は葦邊屋の別荘（今西本氏所有）となつた」と触れられている。文献の御教示に関し、米田頼司氏に御礼申し上げる。西本家へと所有者が変更された後も、「妹背別荘」の名は続けて用いられたと思われ、その痕跡を雑誌「社会画報」で確認することができる。

7　薗田香融・藤本清二郎「歴史的景観としての和歌乃浦：和歌の浦景観保全訴訟資料第一集」自費出版（平成３［1991］年）；藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成５［1993］年）；和歌山市立博物館編「和歌浦：その景とうつりかわり」和歌山市立博物館（平成17［2005］年）；和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：和歌浦編（戦前）」和歌山市立博物館（平成23［2011］年）；和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：市街電車編（戦前）」和歌山市立博物館（平成24［2012］年）；和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」和歌山県教育委員会（平成22［2010］年）；溝端佳則「漱石が見た百年前の和歌山：写真・小説・日記・新聞記事より」、和歌山県立文書館『和歌山県立文書館だより』和歌山県立文書館、第31号（平成23［2011］年、pp. 2-7；米田頼司編「和歌浦昭和初期再現マップと資料」米田頼司（平成25［2013］年））などが代表的な論考である。菅原正明「妹背山経石通信」（http://imosefutatabi.net/col4/col4.cgi）でも貴重な諸史料の紹介がなされており、重要である。

8　岡田久楠という人物に関しては不明な点が多いが、金子郡平・高野隆之編「北海道人名辞書」第２版（北海道人名辞書編纂事務所、大正12［1923］年）、札幌市を之部、pp. 38-39には「旧姓は貴志。明治17年３月28日、和歌山県和歌山市小松通六丁目生まれ」と記されている。優秀な土木技師であったことが知られ、おそらく地図の作成は不得手ではなかったように思われるが、しかし明治時代の末期における彼の赴任先は遠く離れた北海道であって、和歌の浦の地図をどのように作成できたのかは究明すべき点である。

9　岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」岡田久楠（明治42［1909］年）。

図２：「紀伊和歌浦明細新地図（部分）」、あしべ屋の関連施設を示す（明治42［1909］年、和歌山市立博物館蔵）。

Ａ：本店は数度の建て替えがなされたようである。Ｂ：北の別荘（玉津島別荘）についてはかつての朝日屋を模した萱葺の平屋、及び木造の複層建て２棟などが含まれるが、ここでは一括して扱う。Ｃ：妹背別荘も玄関部、座敷、奥座敷、玉突室などに分かれるが、本稿では一体のものとしてみなす。残念なことに、Ｄ～Ｆに関しては情報が少なく、詳細が不明である。近年、養翠園へ移築されたＤ：湊御殿については三尾功氏による論考がきわめて重要である[10]が、旅館の別荘としてどのような使われ方がなされたのかという詳細までは分かっていない。Ｅ：渡し船の船着場でもあった休憩所は当初、あしべ屋本店の前から不老橋にかけてごく簡素な形式のものが３つ設けられていた[11]。明治32年以降、休憩所は県立和歌公園の管理規制によって不老橋の南側に移され、また当初の屋根のないものから、勾配が緩やかな宝形の屋根を載せ、見晴らしの良い建物の三方に欄干を巡らし、また四面に蔀を備えるものへと形姿が変化しているように見受けられる。Ｆ：海水浴休憩所については最も情報が不足しており、明治末期の写真がわずかに知られているばかりであるように思われる[12]。

最終的にはＡ～Ｆの諸施設に関して考察することを目指すが、当論考では主にＡ：本店を対象とし、既往の研究に従って史料の整理をおこないたい。

10　三尾八朔（三尾功）「湊御殿とその遺構」、私家本「城下町の片隅で」所収（平成13［2001］年）、pp. 73-94（初出：「木の国」26号、木国文化財協会、平成12［2000］年）、特にpp. 88-90。文献の御教示をいただいた和歌山市立博物館の額田雅裕氏に厚く御礼申し上げる。

11　薗田香融・藤本清二郎「歴史的景観としての和歌乃浦：和歌の浦景観保全訴訟資料第一集」薗田香融・藤本清二郎（平成３［1991］年）、pp. 59, 62-63；藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成５［1993］年）、pp. 32, 65-66, 68-69, 72, 76-77, 82-83, 88-89, 102-105, 134-135；和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：和歌浦編（戦前）」和歌山市立博物館（平成23［2011］年）、p. 9、「簡単な飲食ができ、昭和初期には『ちん』と呼ばれていた」などを参照。三木甲子郎「和歌之浦公園景」三木甲子郎（明治33［1900］年）ではすでに休憩所が不老橋の南へ移動されている点が看取される。和歌山市立博物館編「和歌浦　その景とうつりかわり」和歌山市立博物館（平成17［2005］年）、p. 22、図30、及びp. 84の解説文を参照。

12　藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成５［1993］年）、pp. 40-41。

３、あしべ屋をめぐる史料の特徴

研究の蓄積が重ねられているものの、和歌の浦に関する諸史料の全貌は未だ明らかにされておらず、基礎資料の入念な検討は途上の段階にあると考えなければならない。この困難な問題については米田頼司氏によって近年改めて指摘がなされている[13]が、絵葉書などの写真史料を扱う際には修正が施されている可能性を常に勘案する必要が生じ[14]、また刊行物に関しても常識とは異なって、細部を変えた版が存在する点を念頭に置くことが求められている。

「紀伊和歌浦明細新地図」については先に触れたが、この地図の初版は少なくとも2つ存在すると考えられる。図３～６に和歌山市立博物館蔵と西本家蔵の初版を示した。発行年月日はまっ

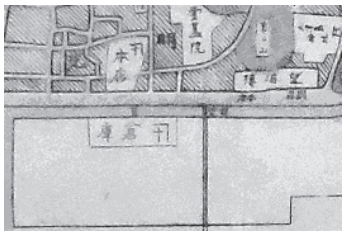

図３：「紀伊和歌浦明細新地図（部分）」
（和歌山市立博物館蔵）

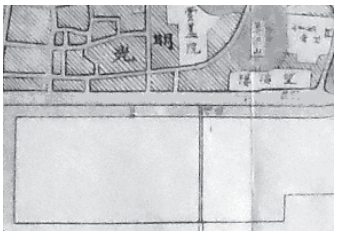

図４：「紀伊和歌浦明細新地図（部分）」
（西本家蔵）

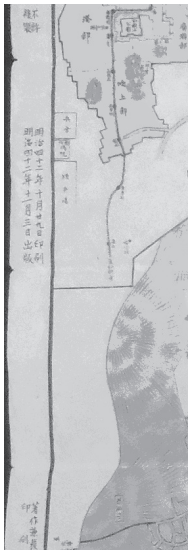

図５：「紀伊和歌浦明細新地図（部分）」
発行年月日を示す（和歌山市立博物館蔵）

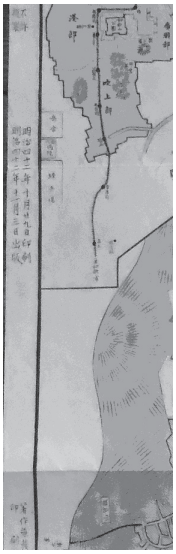

図６：「紀伊和歌浦明細新地図（部分）」
発行年月日を示す（西本家蔵）

13　米田頼司「名所絵葉書にみる景観観と景観変容：『溝端コレクション（和歌の浦）』とその内容分析」紀州経済史文化史研究所紀要33（平成24［2012］年）、pp. 1-34。

14　典型例として、あしべ屋の背後の鏡山に明光台のエレベーターが写っている絵葉書を挙げることができる。溝端佳則氏に御教示いただいた点を感謝申し上げる。（和歌山県立文書館パネル展示：エレベーターとその周辺の風景、平成24［2012］年12月8日～25［2013］年1月20日、https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/gyouji/index06.html。閲覧日：平成25［2013］年10月30日）。同一の写真は、山上に見えるエレベーターの頂部を消す修正が施されて、後年にも絵葉書に引き続き印刷された。

たく同一でありながら、「かねじゅう」の屋号を有していた鈴木商店[15]が、後者の場合では削除されている点が注意を惹く。おそらくは鈴木商店を削除していない版の方が先に刊行されたのであろう。「紀伊和歌浦明細新地図」は他に和歌山県立図書館と溝端佳則氏が所蔵しているが、和歌山県立図書館の版は和歌山市立博物館のものと同一であり、また溝端佳則氏蔵の地図については西本家蔵のものと同じである[16]。

同様の問題はあしべ屋が広告のために出版した小冊子「紀伊和歌浦図」[17]でもうかがわれ、これまで確認ができた13冊を実見した結果、明治26［1893］年の初版と明治29［1896］年の再版に大別されるが、各々はさらに3つに類別されることが判明した（表１）。

「紀伊和歌浦図」の米栄旅館版と呼ぶべきものも別に存在し（溝端佳則氏蔵「和歌浦出島 米栄別荘」）、内容はほとんど明治29［1896］年の改訂版と同じである一方、米栄旅館の建物の姿が挿入されている点が特徴である。

さらに、あしべ屋は観光名所の写真を12枚並べた一枚刷りの「和歌の浦名勝拾弐景」[18]を販売したが、これと同名のものは米栄旅館の別荘でも頒布された[19]。内容の改訂を正しく伝えないまま、同じ旅館から繰り返し部分的に改変された刊行物が出版され、また同名の刊行物が他の旅館からも内容を変えて出されている。和歌の浦を総体的に捉えようとする「和歌の浦学」の確立のためにはこうした錯綜した情報の全体を網羅することが必要であり、これは壮大なパズルを解く作業と似ていなくもない。

大正年間に出版された「新和歌浦と和歌浦」[20]には少なくとも3種類の異本の存在が知られ、研究者を惑わせる典型となっている。良く知られている旅館である米栄と望海楼は、店名を冊子の裏に印刷しているが、その外見の違いだけではなく、差異が最もあらわれているのは巻頭に挟まれた2色刷りの折り込み地図であり、他の旅館の名前を部分的に消した上で、広告したい各自の旅館名を赤字で印刷することをおこなっている（図７～９）。ノンブルが振られているページの合間に挟まれた広告も同一でない。以上の点は、題名や奥付の記述が合致していても本の内容

15　醤油屋を営んでいた鈴木商店に関しては、藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成5［1993］年）、p. 37において言及が見られる。鈴木商店について御教示をいただいた溝端佳則氏に感謝申し上げる。

16　「紀伊和歌浦明細新地図」は翌年の明治43（1910）年に再版が刊行されている（香川県立ミュージアム蔵）。しかしこの再版の体裁に関しては、やはり岡田久楠が発行した「名所旅館案内和歌浦地図」（初版：明治42［1909］年）と体裁が酷似しており、ふたつの刊行物の関連性を調べることが必要である。「名所旅館案内和歌浦地図」（初版：明治42［1909］年）を述べた論考として、芳賀啓「明治末期の和歌浦」古地図研究ニュース54（平成19［2007］年）、p. 6、及び巻末の添付地図（「名所旅館案内和歌浦地図」、3版：明治45［1912］年）を参照。

17　塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」塩崎毛兵衛（初版：明治26［1893］年、改訂版：明治29［1896］年）。なお、色刷りの富永正太郎「紀伊和歌浦之図」富永正太郎（明治26［1893］年。和歌山県立博物館蔵）との図の詳細な比較も今後の課題である。

18　伊勢本嘉三郎「和歌の浦名勝拾弐景」伊勢本嘉三郎（明治38［1905］年、発売：あしべ屋、薮清一郎）。なお、同様の掲載内容であるが、若干異なった題名を有する「和歌浦名所拾弐景」が明治34［1901］年にあしべ屋から発売されている。

19　塩崎毛兵衛「和歌の浦名勝拾弐景」塩崎毛兵衛（明治42［1909］年、発売：米栄別荘）。薗田香融・藤本清二郎「歴史的景観としての和歌乃浦：和歌の浦景観保全訴訟資料第一集」薗田香融・藤本清二郎（平成3［1991］年）、pp. 54-55。塩崎毛兵衛は、あしべ屋の広告冊子「紀伊和歌浦図」も出版している。

20　浜口弥「新和歌浦と和歌浦」枇榔助彌生堂（大正8［1919］年）。なお、和歌山県立図書館蔵のものは、数ページが失われているとは言え、著者が寄贈しており、彼の手によると思われる書き込みがうかがわれる点で貴重である。国立国会図書館関西館蔵のものと同一の版と考えられる。

が完全に同じとは限らないことを意味しており、このため文献引用の際には差し当たり史料の所蔵先を逐一明記する注意が望まれよう。和歌の浦の旅館に関する詳しい研究を進める際、充分に留意しなければならない点と考えられる。明治・大正時代は、メディアに大改革が急激に訪れた時期であった。これにあわせて和歌の浦の旅館はきわめて柔軟に対応したのであり、江戸時代か

	番号	所蔵箇所に基づく名称	奥付に「明治二十六年五月二十三日出版」と記載	奥付に「明治二十六年六月三日発行」と記載	奥付に「明治二十六年六月一日発行」と記載	奥付の後にあしべ屋の広告二丁を付加	奥付に「明治廿九年四月十四日更正御届」と加筆し、里程表を増補	各図における表題を変更	三丁表、和歌浦全図で「芦辺や汐湯」を囲む枠を四角く変更	三丁表、和歌浦全図で「海水浴場」を削除して朱印に変更	十三丁表、巻末のあしべ屋広告で蠟飯の価格「七銭」などを削除	二丁裏、和歌浦全図で小屋と煙を削除	十一丁裏、海岸線を一部削除	二丁表、「潟を浪」を「片男なミ」と変更	五丁裏、「旧四月十七日東照宮御祭礼」の「旧」の部分を塗り潰し	五丁裏、「旧四月十七日東照宮御祭礼」の「旧」の部分を削除	十一丁表、芦辺屋ノ図で船渡しの賃金「九銭六厘」を削除	十一丁表、芦辺屋ノ図で船渡しの説明欄そのものを削除	包紙の有無	備考
初版 明治26年 （1893年）	1	和歌山県立図書館蔵 A （番号 311452668）	○																	表紙付け替え。
	2	西本個人蔵 A	○																	薄墨版の刷りを欠いた版。 裏表紙に「旅舎岡長」の印。
	3	国立国会図書館関西館蔵 （番号 特52−124）		○																唯一、「明治二十六年六月三日発行」の奥付を有する。
	4	和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵 A （番号 360−1）			○	○														表紙が退色。
	5	西本個人蔵 B			○	○														表紙が甚だしく退色。
改訂版 明治29年 （1896年）	6	野田市立興風図書館蔵 A （番号 107）			○	○	○	○	○	△ 朱印が特異	○	○	○							和歌浦全図に「海水俗場」の朱印。 裏表紙に「茂木信太郎」の記名。
	7	和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵 B			○	○	○	○	○	△ 朱印なし	○	○	○	○			○		有	「海水浴場」の削除のみで朱印なし。 包紙の表書きに「紀伊国和歌浦図」、また「明治廿六年五月出版」と朱刷。
	8	和歌山県立図書館蔵 B （番号 311664825）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○			和歌浦全図に「芦辺海水場」の朱印。
	9	和歌山市立博物館蔵 A （番号 2890）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○			和歌浦全図に「芦辺海水場」の朱印。 裏表紙に「明治三十二年四月二日大道」の書き込み。
	10	野田市立興風図書館蔵 B （番号 106）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○			和歌浦全図に「芦辺海水場」の朱印。
	11	和歌山県立図書館蔵 C （番号 311458998）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○		表紙は県立図書館蔵 Bのコピー。 和歌浦全図に「芦辺海水場」の朱印。
	12	和歌山県立博物館蔵			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	有	和歌浦全図に「芦辺海水場」の朱印。 包紙の表書きに「紀伊国和歌浦図」、また「明治廿六年五月出版」と朱刷。
	13	和歌山市立博物館蔵 B （番号 3246）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○		和歌浦全図に「芦辺海水場」の朱印。

表１：「紀伊和歌浦図」の初版と改訂版

ら続く印刷方法を継承しながらも次第に新たな出版形態を取り込みつつ、写真を駆使するように変容する。その変化の仔細を追うことも、本研究に課せられた仕事と言えよう。

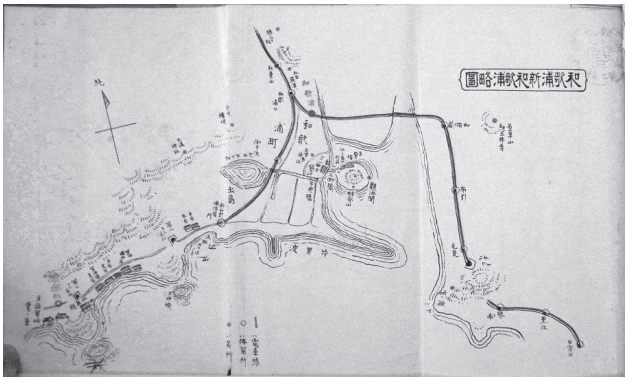

図７：「新和歌浦と和歌浦」（和歌山県立図書館蔵）。

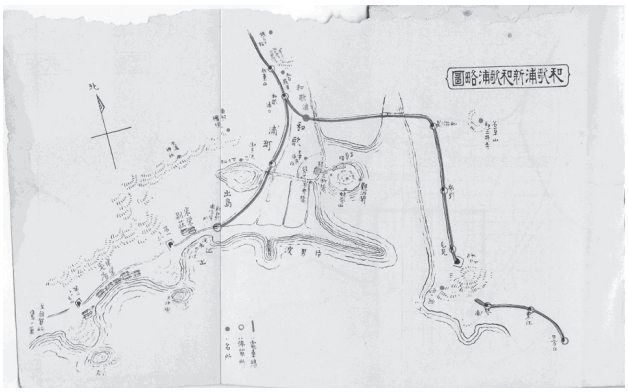

図８：「新和歌浦と和歌浦」、米栄版（西本家蔵）。

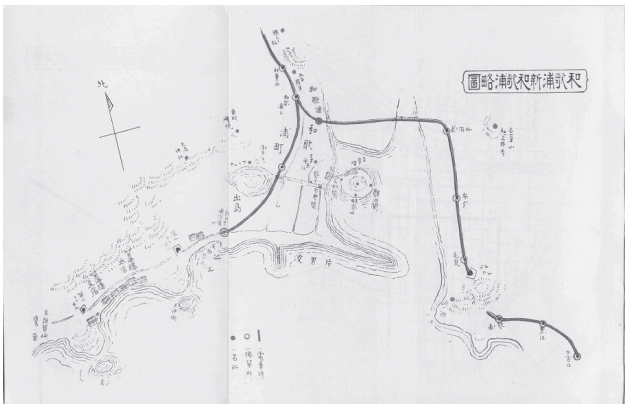

図９：「新和歌浦と和歌浦」、望海楼版（西本家蔵）。

４、明治・大正時代におけるあしべ屋の変遷

あしべ屋旅館の初期を写した写真が最近発見され、新聞にも2012年に掲載された[21]。総２階建ての南側に平屋が付設された姿を伝えており、非常に貴重である（図10）。新聞では明治10年代に遡る可能性が指摘され、注目される。この建物の様子を第１期と呼ぶこととする。ここでは若干の時代の幅を勘案し、あしべ屋の第１期は明治10年代から20年代初頭とみなしたい。新島襄・八重夫妻が明治10年に和歌の浦を訪れた際、あしべ屋はすでにこのような姿を呈していたかもしれないが、まだ旅館としての設備を充分に整えていなかったことも考えられよう。写真の右端には「紀伊和歌芦部家」という文字が特徴的な装飾を持つ枠内に記されている。ほぼ同時代に属すると思われる鶏卵紙写真（図11）の左端でもこれと同様の装飾枠がうかがわれ、すでにこの時代、単写真だけではなく、組写真でも和歌の浦を表現しようとする意識があったことが明瞭に伝えられている。

図10:「紀伊和歌芦部家」（鶏卵紙写真、溝端佳則氏蔵）

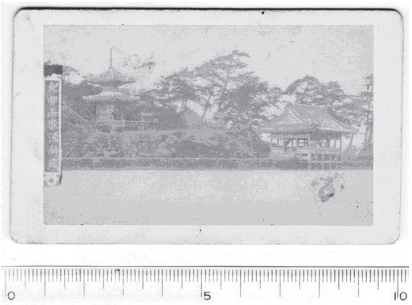

図11：「紀伊和歌浦拝殿」（西本家蔵）

あしべ屋の外観についてはこれまで総３階建てに平屋が取り付いた建物が知られるのみであった。あしべ屋から刊行された小冊子「紀伊和歌浦図」（初版：明治26［1893］年、改訂版：明治29［1896］年）で見られる建物の様子はしばしば引用されており、図12～13に示す。図12では、Ｂ：北の別荘（玉津島別荘）に含まれるべき複層木造家屋はまだ設けられていないようである。図13ではいくらか室内が観察され、興味深い。

双方の図より、２階の廊下から地上に降りることができるように階段が備えられていた点が了解され、実際にこうした形式があったことは写真からも確認される（図14）。これは白黒写真に手彩色されたものであり、写真表現のさらなる拡大が図られている点が看取される。旅館の手前には屋根のない簡素な形式の休憩所もうかがわれる。

さて、野口保興編「地理写真帖:内国之部第３帙」東洋社（明治33［1900］年）の第16図「和歌の浦」にもあしべ屋本店が背景に写っており、拡大して見ると、階段があった様子を同様に伝えていることが了解される（図15）。旅館の手前にはやはり簡素な休憩所が看取される。図14～15の写真を図10と比較した場合、複層建ての左側に平屋を併設するという全体の構成が良く似ていることは特筆される。当初の２階建ての上に３階部分を増築したのではないかという疑念が

21　毎日新聞和歌山版、2012年７月19日。

浮かぶかもしれない。実際にそうした例が知られているからである[22]。しかし詳細に柱間などを観察する限り、この説は排除できるように思われる。平屋建て部分の屋根も、切妻造から寄棟造

図12：「紀伊和歌浦図」2丁裏（部分：西本家蔵）

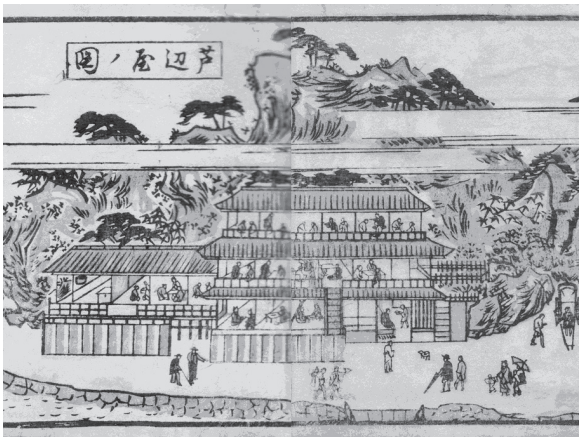

図13：「紀伊和歌浦図」10丁裏と11丁表（部分：西本家蔵）

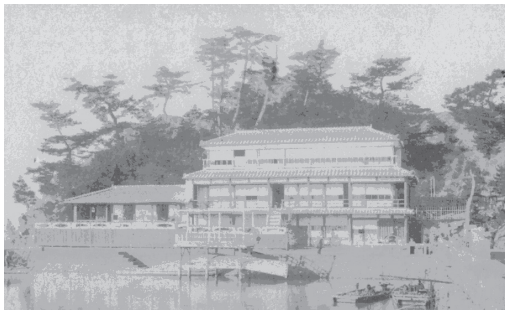

図14：あしべ屋を示した古写真
（部分：溝端佳則氏蔵）

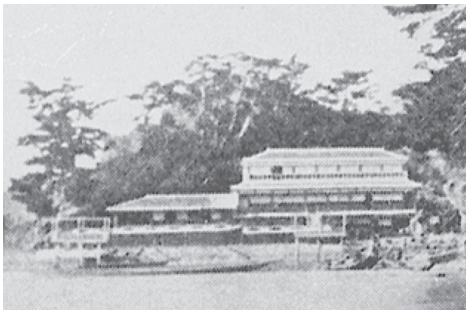

図15：「地理写真帖：内国之部第3帙」第十六図：
和歌の浦（部分：国立国会図書館関西館蔵）

22　明治時代末期において木造2階建ての上に3階部分を増築している旅館で現存している例としては、群馬県・四万温泉の積善館を挙げることができる（http://www.sekizenkan.co.jp/info/history.html、閲覧日：平成25［2013］年10月31日）。あしべ屋と同じように2階から地上に降りることができるよう、階段が備えられた点も注目される。

へと改変されているらしく見える。この平屋建ての部分が何に使われたのかは興味深く思われ、さらなる検討を要するものの、「紀伊和歌浦図」において床高さが一段上がっており、玄関からも遠く離れ、また縁側が鉤型に折れ曲がって西面と南面に巡っているさまを考える時（図13）、ここが貴賓のための部屋として用意されていたとも推測される。本稿ではこの時期のあしべ屋を第2期Aと呼称する。明治22年の春に小泉信吉とその妻、また幼少であった小泉信三が滞在した時期のあしべ屋が、この形姿を示していた可能性が指摘される。第2期Aは明治20年代初頭から、明治30年代初頭にかけての姿と比定されよう。。

後に第2期Aの階段は取り払われて、総3階建ての正面中央部分の2階には切妻の庇が設けられたらしい（図16）。この姿は田井久之助「和歌浦名所拾弐景」あしべ屋薮清一郎（明治34［1901］年）で見られる他、あしべ屋の大正2年の年賀状（図20）にも同じ姿があらわされており、今のところ、明治30年代初頭から大正時代の初頭まで存続したと想定しておくのが良いと考えられる。建物全体の改変が認められず、部分的な改変のみがおこなわれたと考えられるので、この時期のあしべ屋を第2期Bとする。

明治30年代の文献資料としては、宇田川文海[23]、田山花袋[24]、また中山昇三[25]の著作が挙げられるが、明治35（1902）年に刊行された田井久之助[26]「紀伊名所」では色刷りであしべ屋の様

図16：階段が取り払われた後のあしべ屋、及び北の別荘（西本家蔵）

23　宇田川文海「紀泉名勝案内」太陽第4巻24号（明治31［1898］年）、pp. 154-164：「夫から（芦辺茶屋）、昔は芦辺屋朝日屋の二亭とも、萱葺の屋根に縄暖簾を垂れた、風流素朴なものでありましたが、世の文明と共に進化して、今は芦辺屋は和洋混交三階作りの巍然たる高楼となり、朝日屋の方は其別宅として、平屋作りの亭坐敷、僅に昔の面影を残してあります」；宇田川文海「南海鉄道旅客案内」下巻（南海鉄道、明治32［1899］年）、pp. 84-85：「昔は芦辺屋、朝日屋の二亭ありて、萱葺の屋根に暖簾を垂れたるものなりしか、今は芦辺屋の方は、巍然たる高楼となりて料理を専らにし、芦辺の汐湯とて、海水を沸して来客の便に供ふ、朝日屋の方は、あしべ屋の別宅として、平屋にて面白き庭を構へ、昔の芦辺茶屋の面影が残してある、世と共に変遷るはすべての習慣なれば、実によんどころなき事とは云へ、和歌の浦の風景の為より云へば、此茶亭は昔の姿のまゝにしておきたく思ふ、紀三井寺より見れば、殊に其感じが多い」。

24　田山花袋編「新撰名勝地誌 巻之九、南海道之部」（博文館、大正3［1914］年）、p. 490：「和歌浦には旅館芦辺屋最も古くして且つ大なり」；pp. 491-492：「名高き芦辺茶屋、またこの地にあり」；p. 495：「猶ほ前出芦辺茶屋はこの神社の南に当る。茶屋は美しき入江に面し、楼上より望めば、景趣恰も画くが如し」。

25　中山昇三「紀伊国旅の友」中山昇雲堂（明治32［1899］年）、pp. 6-7の合間の広告、2ページ目、「名にし負ふ芦辺の南に位置を卜し眺望風景とも佳絶風流雅致なるを以て大昔徳川頼宣公より御休所の御用を命せられ候以来今日に至るまで連綿として営業罷在候現今は妹背山の麓に塩湯を設け終日来客諸君の入浴し得るの便に供し可申候尚料理会席は安価を主とし丁寧に可仕候間陸続御光来の程奉願候敬具」。

子が示されており（図17）、画像資料として重要である。この「紀伊名所」6枚を収めた袋の裏には「特約販売所あしべ屋薮清一郎」と印刷され、あしべ屋の出版活動を見る上で注目される。本店の前には休憩所が建っている点も注意を惹くが、前述したように明治35年の時点ではこの休憩所はあしべ屋の前になかったであろう。右側には萱葺の平屋も描かれている。明治34年2月に南方熊楠が孫文と再開した際のあしべ屋は、こうした構えの時期であったと推測することができる。

続く第3期では、南側にあった平屋が取り去られ、その敷地を含め、横幅が伸長された大型の複層建築が新たに建立された（図18）。この建物では左右の対称性が意識された計画であったことが了解される。本店のすぐ右隣りには煙突を有する建物が見え、ここに浴場が設置されていたと思われる。図18で示したのは望海楼の支店となった時期のもので、時代はあしべ屋が廃業した大正14年以降に違いない。新和歌浦の万波楼も同じ支店として運営されていたことを示すホテルラベルが残っており、資料的価値が高い[27]（図19）。

図17：田井久之助「紀伊名所：三橋よりあしべやを望む」
田井久之助（明治35［1902］年。菅原正明「妹背山経石通信第147号の1」）

図18：望海楼の支店としてのあしべ屋（西本家蔵）

26　田井久之助の名は、あしべ屋が販売した一枚刷りの「和歌浦名所拾弐景」（明治34［1901］年）の著作兼印刷人としても記されており、注意を惹く。田井久之助は明治時代に多くの名所絵を刊行した人物である。

27　当時の旅館の様相を知る上で、こうした細かい品々への注目も欠かすことができない。日本全国におけるホテルタグの収集の成果としては三枝浩氏のサイト、http://www.hotel-label.com/tag-wakayama.htmlを参照。

図19：望海楼の支店となったあしべ屋の名が記されているホテルラベル、２種
（三枝浩氏蔵。大：直径8.4cm。小：直径7.9cm）

第3期は大正時代の初頭から昭和時代の前期にかけての姿であるが、これと重なる明治時代末期から大正時代にかけては、あしべ屋の付属施設がめまぐるしく変わる時期であり、建物の変更を裏づける史料は詳らかではない。「紀伊名所案内」[28]の巻頭写真には、勾配の強い屋根を持つ洋風の小屋の姿が妹背の島でうかがわれ、このビリヤード場が明治42（1909）年までには建てられていた点が知られる。同書に「あしべ屋は和歌公園妹背山に面する、料理兼旅館なり、別荘は玉津島と妹背の二ヶ所にあり、尚ほ妹背別荘に隣するところ、洋式の球戯室を設く」という文が見られるものの[29]、ここではもうひとつの別荘、つまりD：別荘としての湊御殿（松窓庵）が考慮されていないのが奇異に思われる。ビリヤード場が建てられた後に妹背別荘の奥座敷は増築され、昭和天皇が皇太子の時の大正11（1923）年に立ち寄ったというビリヤード場は不評のためか、まもなく別の場所へと移築された[30]。あしべ屋本店が第3期の姿に変えられたのは、その後のことであろう。夏目漱石が和歌の浦を訪れた際にあしべ屋の付属施設がどこまで揃っていたかについてはさらに考察を重ねるべきであるが、こうした細かな増改築の過程を解く手がかりは、あしべ屋が正月にあわせて毎年送付した年賀状（図20）にあると思われ、これらを精査することで詳しい年代が今後判明すると期待される。「今回遊技場として妹背弊荘内に玉突室を新設」、あるいは「今回大広間新築落成致し」といった短い文面が各年の年賀状には散見されるからであって、建造年代を判断する上でも大きな価値を有する。ここで示した大正2（1913）年の年賀状には明光台エレベーターが写っている他、本店は未だ改築がなされておらず、平屋の部分を左側に有しており、第3期への改変は大正時代の初頭であったという意見を支持する史料となるであろう。

28　大川民輔（墨城）「紀伊名所案内」紀伊名所案内発行所（明治42［1909］年）。
29　前掲書、p. 137。
30　重松正史「大正デモクラシーの研究」（清文堂出版、平成14［2002］年）、p. 37：「例えば、玉突場として建設された西洋風（擬似西洋風）の建物が俗化の最たるものとして批判されている」。

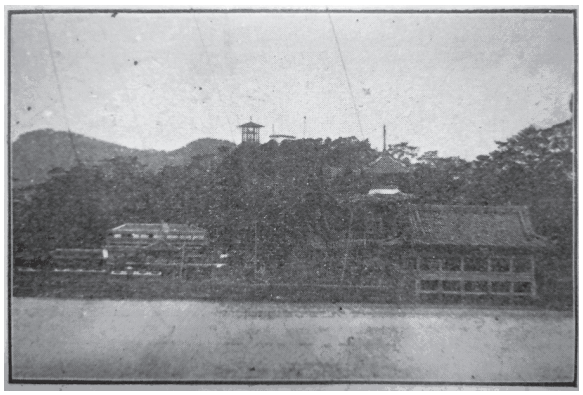

図20：あしべ屋から発送された大正2（1913）年の年賀状
（部分：尼崎市立地域研究史料館蔵、川端正和氏之書（4）685）

大正9（1920）年に薮清一郎は浦田しげにあしべ屋の営業主としての立場を移譲するものの、旅館の経営は思わしくなく、前述した通り、大正14（1925）年にあしべ屋は廃業する。だが望海楼に吸収された後も建物は残って、あしべ屋の名前はそのまま用い続けられた。妹背別荘もまた西本健次郎に譲られてからも、そこに皇族が訪れることがあったらしい（図21）。昭和6（1931）年に「萬両」の出版記念会のため阿波野青畝とともに山口誓子や高浜虚子たちがあしべ屋を訪れた時、本店は北の別荘とともに第3期の状態にあったはずである[31]。だが妹背にはビリヤード場

図21：高松宮殿下を中心に妹背別荘の前で撮影（昭和25［1950］年8月15日撮影、菅谷恵子氏蔵）

31　この他、和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」和歌山県教育委員会（平成22［2010］年）、p. 130の年表には、昭和4（1929）年6月に「芦辺屋経営主、坪内逍遥作和歌浦あしべ踊り・音頭を発表」と記されている。

32　現在の芦辺屋朝日屋跡地には階段が刻まれた岩塊が残っているが、2階へ昇るために設けられたものであろう。同様の例として和歌山県内では東濱口邸を挙げることができる。木村秀男・本多友常・平田隆行「和歌山県有田郡広川町東濱口邸について」日本建築学会大会梗概論文集F-2分冊（平成20［2008］年）、pp. 241-242。また東端秀典「濱口家住宅：本宅・本座敷・三階建て座敷」和歌山県建築士会HP「和歌山の建築と文化：紀州近代化遺産めぐり」http://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/490.html、及びhttp://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/493.html（閲覧日：平成25［2013］年10月31日）も参照。

図22：昭和29（1954）年9月、台風の来襲を妹背山の頂上より撮影（撮影：西本瑛一郎）

がない状態で、奥座敷が増築された妹背別荘は個人に譲渡されていたということになろう。

昭和時代に入るとやがて本店の隣にあった茅葺屋根の平屋は取り壊され、そこには近代的な建物が築造された（図22）。これがあしべ屋の最後の姿となるはずである。本店とその隣の建物はやがて撤去された。現在、その跡地には往時の繁栄を示す説明板が立っているのみである[32]。

5、結語

和歌の浦を巡る諸史料を扱う上で注意すべき点を確認しつつ、既往研究の整理をおこないながら主としてあしべ屋本店における明治・大正時代の増改築の過程を大きく3つに分け、またここを訪れた代表的な文人たちの各々の時期に対応する建物の姿を示した。関連資料の収集は未だ途上にあり、さらに追究を深めたい。

謝辞

和歌山大学教育学部藤本清二郎教授と米田頼司教授、和歌山市立博物館の額田雅裕氏、和歌山漱石の会の梶川哲司氏にはさまざまな文献資料の御教示をいただいた。伊藤勲氏からは名所絵に関する貴重な情報を御提供いただいた。記して感謝申し上げたい。和歌山市立博物館、和歌山県立図書館、国立国会図書館関西館、玉津島保存会の溝端佳則幹事、「かつらぎ」発行所の森田教子氏、尼崎市立地域研究史料館・辻川敦館長、また菅原正明氏、三枝浩氏、菅谷恵子氏にはそれぞれ貴重な資料の転載をお許しいただいた。東濱口邸の見学に当たっては、東濱植林株式会社の塩路信兼常務取締役、有限会社坂井家起こしの坂井誠治代表取締役と坂井竹男氏、西岡建築一級建築士事務所の西岡健一氏、株式会社菖蒲谷の坂東大介氏にお世話になった。各氏・各機関に厚く御礼を申し上げる。

参考文献

秋山加代編「現代の随想4 小泉信三集」彌生書房（昭和56［1981］年）。
伊勢本嘉三郎「和歌の浦名勝拾弐景」伊勢本嘉三郎（明治38［1905］年、発売：あしべ屋、薮清一郎）。
伊藤勲「新撰 明治名所絵博物館」伊藤勲（私家本、平成22［2010］年）。
大川民輔（墨城）「紀伊名所案内」紀伊名所案内発行所（明治42［1909］年）。
岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」岡田久楠（明治42［1909］年）。
梶川哲司「漱石の作品にみる和歌山1～8」和歌山県高等学校社会科研究協会会報、第54号（平成16［2004］年）、pp. 60-73；第55号（平成17［2005］年）、pp. 21-35；第56号（平成18［2006］年）、pp. 22-39；第57号（平成19［2007］年）、pp. 43-59；第58号（平成20［2008］年）、pp. 23-42；第59号（平成21［2009］年）、pp. 2-13；第60号（平成22［2010］年）、pp. 2-19；第61号（平成23［2011］年）、pp. 17-39。
金子郡平・高野隆之編「北海道人名辞書」第2版（北海道人名辞書編纂事務所、大正12［1923］年）。
木村秀男・本多友常・平田隆行「和歌山県有田郡広川町東濱口邸について」日本建築学会大会梗概論文集F-2分冊（平成20［2008］年）、pp. 241-242。
「小泉信三全集」第16巻（文藝春秋、昭和45［1970］年）、pp. 120-130。
里見弴「若き日の旅」（中市弘、昭和15［1940］年）。
塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」塩崎毛兵衛（初版：明治26［1893］年、改訂版：明治29［1896］年）。
塩崎毛兵衛「和歌の浦名勝拾弐景」塩崎毛兵衛（明治42［1909］年、発売：米栄別荘）。
志賀直哉・木下利玄・山内英夫「旅中日記 寺の瓦」（中央公論、昭和46［1971］年）。
重松正史「大正デモクラシーの研究」（清文堂出版、平成14［2002］年）。
島津俊之「経験とファンタジーのなかの和歌浦：田山花袋『月夜の和歌浦』を読む」、空間・社会・地理思想14号（平成23［2011］年）、pp. 41-67。
菅原正明「妹背山経石通信」。http://imosefutatabi.net/col4/col4.cgi（閲覧日：平成25［2013］年10月31日）。
薗田香融・藤本清二郎「歴史的景観としての和歌乃浦：和歌の浦景観保全訴訟資料第一集」薗田香融・藤本清二郎（平成3［1991］年、増補版：ウイング出版部、平成25［2013］年）。
田井久之助「和歌浦名所拾弐景」薮清一郎（明治34［1901］年）。
田井久之助「紀伊名所」田井久之助（明治35［1902］年）。
高嶋雅明「近代の開発と和歌浦」和歌山地方史研究17（平成元［1989］年）、和歌山地方史研究会、pp. 32-37。
高嶋雅明「和歌浦開発と和歌浦土地株式会社：若干の資料紹介と覚え書」、紀州経済史文化史研究所紀要第10号（平成2［1990］年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、pp. 25-40。
高嶋雅明「近代の和歌浦」薗田香融監修、藤本清二郎・村瀬憲夫編「和歌の浦：歴史と文学」和泉書院（平成5［1993］年）、pp. 115-139。
滝上巨志「皇室と紀州」和歌山大公論社（大正11［1922］年）。
田山花袋「南船北馬」（博文館、明治32［1899］年）。
富永正太郎「紀伊和歌浦之図」富永正太郎（明治26［1893］年）。
中山昇三「紀伊国旅の友」中山昇雲堂（明治32［1899］年）。
「新島襄全集」第6巻：英文書簡編、同朋舎出版、（昭和60［1985］年）。
西本直子・西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」、武蔵野大学環境研究所第2号（平成24［2012］年）、pp. 77-93。
野口保興編「地理写真帖：内国之部第3帙」東洋社（明治33［1900］年）。
浜口弥「新和歌浦と和歌浦」枇榔助彌生堂（大正8［1919］年）。
藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成5［1993］年）。
三尾八朔（三尾功）「城下町の片隅で」私家本（平成13［2001］年）。
三木甲子郎「和歌之浦公園景」三木甲子郎（明治33［1900］年）。
溝端佳則「漱石が見た百年前の和歌山：写真・小説・日記・新聞記事より」、和歌山県立文書館『和歌山県立文書館だより』和歌山県立文書館、第31号（平成23［2013］年）、pp. 2-7。

「南方熊楠全集」別巻2（平凡社、昭和50［1975］年）。
「牟婁新報」明治44（1911）年11月9日の新聞記事。
山内慶太「慶應義塾史跡めぐり第80回：紀州和歌山と義塾の洋学」三田評論1168（平成25［2013］年）、pp. 68-71。
山本喜平「海草郡誌」和歌山県海草郡役所（大正15［1926］年）。
米田頼司「名所絵葉書にみる景観観と景観変容：『溝端コレクション（和歌の浦）』とその内容分析」紀州経済史文化史研究所紀要33（平成24［2012］年）、pp. 1-34。
和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」和歌山県教育委員会（平成22［2010］年）。
和歌山県建築士会HP「和歌山の建築と文化：紀州近代化遺産めぐり
http://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/490.html、及びhttp://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/493.html（閲覧日：平成25［2013］年10月31日）。
和歌山県洋風建築研究会編「和歌山県の近代建築（明治・大正・昭和各期）：ガイドブック」和歌山県洋風建築研究会（昭和59［1984］年）。
和歌山市立博物館編「和歌浦：その景とうつりかわり」和歌山市立博物館（平成17［2005］年）。
和歌山市立博物館編「写真にみる戦後の和歌山：復興と人々のくらし」和歌山市立博物館（平成21［2009］年）。
和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：和歌浦編（戦前）」和歌山市立博物館（平成23［2011］年）。
和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：市街電車編（戦前）」和歌山市立博物館（平成24［2012］年）。